

# 我ら「ゴンビ」人間

7月12日に亡くなった大橋巨泉さん(享年82)の死後、

妻・寿々子さんが発表したコメントが物議を醸している。

「先生(看取った医師)から

は「死因は“呼吸不全”

ですが、(中略)最後に受けたモルヒネ系の鎮痛剤の過剰投与による影響も大き

い」と伺いました。もし、

一つ愚痴をお許しいただければ、最後の在宅介護の痛み止めの誤投与が無ければ

と許せない気持ちです」

過去、胃がんを始め3度

にわたるがん手術を乗り越えてきた巨泉さんは、国立

がん研究センターで放射線治療などを受けた後、今年

4月に退院し、千葉県内の自宅で在宅医療を受けていた。

それを担つたのが、近所の在宅診療所の院長である

## 大橋巨泉 モルヒネ投与医師は

### 『キビ治療』の専門家だった

A医師だった。A氏は、巨泉さんが「背中が痛い」と

いうと、モルヒネ系の鎮痛剤を処方したという。巨泉

さんはその後、一人で歩けなくなるほど体力が低下し、

再びがんセンターに入院。

それから約3か月後にこの

世を去った。寿々子さんは

今も鎮痛剤の服用を後悔し

ているという。

巨泉さんの親族が語る。

「親族はみな後悔の気持ちでいっぱいです。あとで調

べたら、A氏は皮膚科や美

容形成外科の分野で有名な

医師だったと知り、驚きま

した」

A氏はもともと防衛医科

大学病院の形成外科医と

して勤務後、都内に美容皮

膚科クリニックを開業。重

症のキビに対する光線力

学療法で話題を呼び、ニキ

ビ治療に関する著書も出版

するなど、業界内では有名な存在だった。

だが、その得意分野においてもこんな過去があつた。

防衛医大病院の形成外科医

時代の98年に、あざの治療をめぐって医療事故訴訟を起こされていたのである。

原告であるフリーライター

の井上静氏によれば、裁判

では「十分な説明がなされ

ないまま手術をした診療契

約上の債務不履行にあた

いでいっぱいです。あとで調

べたら、A氏は皮膚科や美

容形成外科の分野で有名な

医師だったと知り、驚きま

した」

「私は背中の手術だったた

め、命に影響はなかつたが、

巨泉さんは違う。形成外科

医ががん患者の在宅医療に携わっているとは思いもよ

りませんでした」

今回の背景には、高齢化

の在宅診療所の院長である

「在宅医療」の構造的問題があると、この分野のパイオニアとして知られる長尾クリニックの長尾和宏院長がいう。

「多くの医師が在宅医療に続々参入していますが、終末期医療や在宅緩和ケアに関する教育体制が追いついていません。皮膚科や眼科など緩和医療の研鑽を積んでいない医師が、末期がんの在宅患者を診ている場合もあるのが実情です」

A氏が経営する診療所に取材すると、「(巨泉さんのことも裁判のこと)何も答えられない」というのみだ

草葉の陰で何を思う?

